

[原著論文]

内蒙古におけるモンゴル語ネイティブの外国語専攻大学生に対する 学習実態の考察

包 阿栄*

The investigation of learning of the students in the foreign language majors who are taught in Mongolian in Inner Mongolian area

Arong Bao*

Abstract

It is the inescapable responsibilities of the universities in Inner Mongolia to improve the Mongolian Nationality's foreign language quality and cultivate international talents of ethnic minorities. But in the universities in Inner Mongolia, there are still some problems that can lead to the current situations. Such as the students who are taught in Mongolian are educated as the students in the major foreign language so late that their achievements fall behind the students who are taught in Chinese. In the thesis, the survey is based on the students and the teachers who are in the major foreign language in four universities, such as Inner Mongolia University, Inner Mongolia Normal University, Inner Mongolia Nationality University and Hohhot Institute for Nationalities. In order to find out the obstacle which obstructs the students' foreign language learning in their teaching. Some methods that can solve these problems are provided.

KEY WORDS : the students who are taught in Mongolian, the major foreign language education, the current situation survey, the essential factors

はじめに

中国の内蒙古における外国語専門の大学生は、中国語ネイティブ、モンゴル語ネイティブと大別できる。その中、モンゴル語ネイティブの学生は、学力の面で中国語ネイティブの学生に比べて、一定の格差があると認められている。しかし、専門研究分野では、バイリンガルの生徒はモノリンガルの生徒に比べて、第三言語を獲得するのが早く、バイリンガルの人の言語能力もモノリンガルより高い、もしくは同程度であると多

く報告されている¹⁾。「言語能力は高いのに成績は悪い」という現象が発生している。その裏にあったモンゴル語ネイティブの学生たちの外国語学力に影響するものは一体何であろうかというリサーチクエスチョンを持ちながら本研究を進めてきた。

内蒙古に英語と日本語の専門学科が設置された大学は短大と大学を合わせて6校ある。本研究は、その中から内蒙古大学、内蒙古師範大学、内蒙古民族大学、呼和浩特民族学院を選び、2010年から4校の教師および学生を対象にアンケート調査を実施し、加えて、

* 内蒙古大学
九州共立大学

* Inner Mongolia University
Kyushu Kyoritsu University

現地調査を行い、4校の英語科、日本語科に属するモンゴル語ネイティブの在学生の学習実態について考察したものである。

1. モンゴル語ネイティブクラスの概況

1. 入試資格を獲得した期間

内蒙古大学外国語学部は1978年に設立されたが、モンゴル語ネイティブの学生に入試資格を与えたのは2001年であった。初年度に、日本語科は25人、英語科は24人とそれぞれモンゴル語ネイティブのクラスを設置した。その後、2009年に英語科が教師人数不足、学生の学力低下など理由によってそのモンゴル語ネイティブのクラスを中止したそうである。現在内蒙古大学外国語学部では日本語科に属するモンゴル語ネイティブのクラスが1つだけ残っている。

内蒙古師範大学外国語学部は1959年に成立され、英語科、日本語科、ロシア語科から成っている。1997年に英語科にモンゴル語ネイティブのクラスが設置され、30人の学生を募集した。その後、2003年にまた日本語専攻の1クラスが増設され、それも30人のクラスであった。

内蒙古民族大学の外国語学部は1983年に設立され、英語科のモンゴル語ネイティブの学生の初募集は1993年に行われ、一年ごとに30人となっている。日本語科が2009年度と2011年度二回だけ募集されたという。

呼和浩特民族学院は成立して以来、民族教育と呼ばれるモンゴル族学生を対象とする教育を実施されてきた学校である。それゆえに、1993年に増設された外国語学部もモンゴル語ネイティブの学生のみ募集対象とした。1993年ロシア語学部が成立され、1995年に英語学部が設置され、25人募集し、それに、2000年29人の日本語を専攻する学生を募集した。その後、2008年から中国語ネイティブの学生にも入試資格を与え、英語科38人日本語科29人の中国語ネイティブの学生を募集したそうである。

2. 成績から見る格差

モンゴル語ネイティブに対する外国語専門教育は充足時間が遅れているばかりでなく、単に成績から見れば、中国語ネイティブと格差が見られる。中国で外国語専門の学生に対する言語能力を測定する4級と8級試験が行われている。統計資料がないため、全体の状況が分かりにくいだが、英語専門の4級試験の合格率は

内蒙古師範大学では中国語ネイティブが100%に対し、モンゴル語ネイティブが40%であり、8級試験の合格率は中国語ネイティブが40%であり、それに対し、モンゴル語ネイティブのほうが10%という割合である。それに、入手した内蒙古大学の日本語学部の資料をグラフで表示したところ、Fig.1とFig.2のようである。

Fig.1 内蒙古大学日本語学部全国外国語専門4級試験合格率対照図：

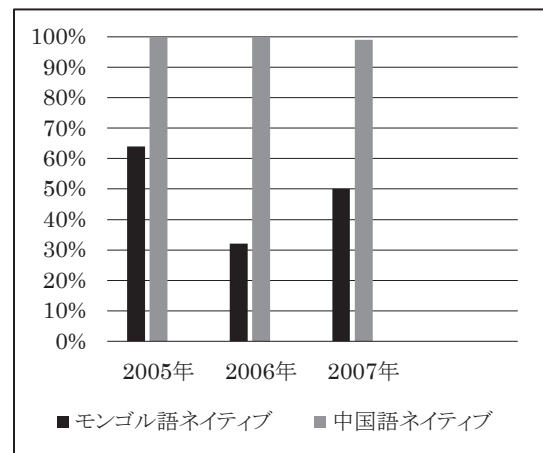
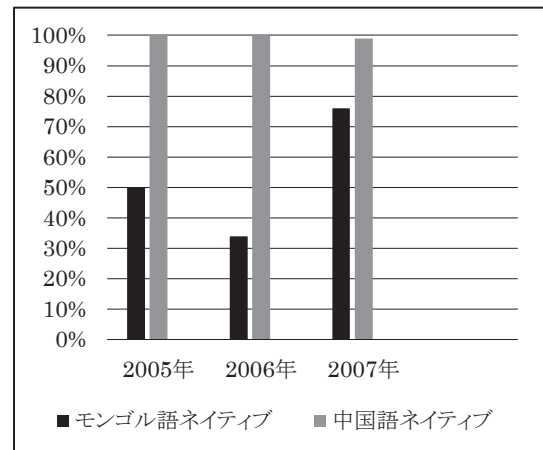


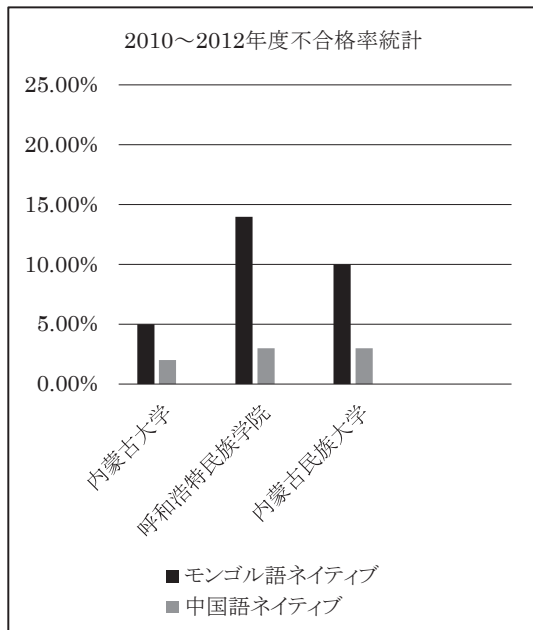
Fig.2 内蒙古大学日本語学部全国外国語専門8級試験合格率対照図：



上の図から内蒙古大学では日本語学部の状況から見れば、合格率の格差があることが分かった。

そのほか、入手した3校の受講単位が一番多い総合日本語という授業の不合格率についても比較してみたところ、結論は同じである。その結果を表すために、二年生の総合日本語の不合格率を例としてFig.3を作った。

Fig.3 二年生総合日本語期末試験不合格率対照表：



不合格率から見ればモンゴル語ネイティブの学生の成績の面でも遅れていることが確かにあると思われる。

II. アンケートの実施

1. 実施対象と方法

本調査は2010年9月から開始し、内蒙古大学、内蒙古師範大学、内蒙古民族大学、呼和浩特民族学院を選び、4校の教師および学生を対象にアンケート調査が行われた。調査対象は4校の英語科、日本語科に在職の英語教師75人、日本語教師27人、在学の英語科学生198人、日本語科学生73人である。本調査を実施するとき、本人の属する内蒙古大学以外の3校での調査は代理人を通じ、各大学の調査対象にアンケート調査表を配布し、回収した。その中記入ミスを除き、有効回答になったのは英語教師向けのアンケート70件、日本語教師向けのアンケート27件、合計97件であり、英語科学生向けのアンケート191件、日本語学生向けのアンケート72件、合計263件である。

2. 実施内容

教師に対するアンケートは日本語教師向けと英語教師向けと分類され、内容は同じである。教師の専攻分野、モンゴル語ネイティブクラスに対する授業効果評価、採用されている教授法、モンゴル語ネイティブ学生の言語学習方面のメリットとデメリット、外国語学習の方略など合計36問である。一方、学生向けのア

ンケート内容も日本語科・英語科向けとも同じ内容の50問であり、学習現状、学習目的、学習ストラテジー、教師の教授法、モンゴル語ネイティブとしてのメリットとデメリットにかかわる質問である。

III. 結果分析

1. 教師向けのアンケートの結果

1) 講義中の言語使用状況：

講義中における目標言語以外の言語使用について、70%の教師が中国語を使用して講義実施されているという。その原因について「自分も中国語を通して英語（日本語）を習得した」が52%、「モンゴル語ができない」が24%、「中国語の教材を使用しているため」が24%挙げられる。

講義中の媒介言語と目標言語の使用状況について、75%の教師が学生の外国語理解力に従って授業中の言語を調整していると回答した。初級段階では主に中国語が使用され、中級段階に入ると中国語の使用は半分になり、高級段階に入ったらほとんど英語または日本語によって授業実施されているという。そして、76%の教師がモンゴル語ネイティブの学生が中国語で受講しても理解できると回答された。その中注目されるのは「学生が授業内容を理解できればどの言語を使ってもいい」という選択肢に対し、41人が「はい」を選択し、それに反し、「できる限り目標言語だけで授業をしたほうがいい」を選択したのも41人であり、両方とも42%占めている。その問題に対し、意見がはっきり異なっていると見られる。

2) 母語及び中国語の影響：

モンゴル語の動詞も語尾の変化があるため英語または日本語の勉強に有利であるという教師もいた。そして、72%の教師は「媒介言語（ここではモンゴル語と中国語のいずれを指す）と目標言語との相違点に関する解釈は目標言語習得に役立つ」を選んだ。

中国語のレベルが外国語習得に対する影響についての解答に「影響が大きい」が11%、「影響がある」が71%、「影響ない」が18%あり、中国語のレベルの外国語習得への影響が認められているようである。

それから、モンゴル語及び中国語が目標言語との共通度について言語別の認識度の割合が大きく異なるのも判然としている。「モンゴル語と中国語とどちらが英語（日本語）に近いか」という質問に対し、答えはTable 1に示したとおりである。

Table1 学科別回答率表 I

項目	中国語		モンゴル語		ほぼ同じ		比較できない	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
英語科	12	12%	9	13%	9	13%	42	56%
日本語科	0	0%	21	78%	4	14%	2	8%

中国語に比べてモンゴル語と日本語間の共通点が多いと多数の日本語科の教師が同じ認識を持っているといっても良い。

3) 外国語習得能力：

モンゴル語ネイティブの学生の発音能力は中国語ネイティブの学生に比べて発達であると答えたのは59%，語彙，文法の学習能力については「あまり相違がない」を選んだのは40%，「中国語ネイティブの学生より優れている」を選んだのは23%である。学生の言語能力について，発音の面における能力が大半に認められていると言えるであろう。

4) 教材使用状況：

まずは現在使用中の教材についての評価を調べた。「使用している教材が学生のレベルに適切なのか」について、「適切」と回答したのは75%，「適当ではない」は20%，「分からない」を選択したのは5%であり，大半の教師は使用中のテキストを肯定しているのが分かった。

次に，教材の言語について，中国語の教材を使用していると答えたのは61%，日本語または英語とは合計38%であり，中国語の教材が半分以上も占め，それ以外は外国語の教科書であると分かり，調査したところ，モンゴル語の教材を使用している教師は1人だけであり，わずか1%である。

最後にモンゴル語教材作りの必要性について調べたところ，「必要がある」を選択したのは38%，「どちらかというと必要がない」を選択したのは50%，「必要がない」を選択したのは12%であり，モンゴル語教材作りに対し，大多数の教師が否定の意見を持っているが，その必要性に執念を持っている人も少なくない。

5) モンゴル語ネイティブクラスに対するイメージ：

まずは長所について，「発音がきれい」，「文法規則の習得が早い」，「言語のニュアンスを把握する能力が高い」などが挙げられる。短所について「学習方法を知らない」，「学力からいえば中国語ネイティブの学生

に劣っている」，「言語以外の知識つまり，歴史，文化，社会など分野に関する知識が不足」，「学習に対する態度が正しくない」，「自律性が低い」，「やる気がない」と数多く指摘された。

6) 教授法について

講義中の採用された教授法を調べたところ，「模倣練習を大量にさせる」，「授業中の雰囲気気を配り，学生たちの興味を引き出す」，「学習方法を学生に紹介する」，「言語の特徴を比較して紹介する」といった授業のやり方が挙げられている。

外国語の教授法に関する専門的な知識を学んだ人がほとんどいなく，個人の経験によって授業を実施しているのが現状のようである。

2. 学生向けのアンケートの結果

1) 言語習得現状についての自己評価

学生たちが自分の外国語学習現状にどう評価しているかを究明するため，幾つかの選択問題を設置した。結果は次のようである，「英語（日本語）に興味を持っているか」についての回答の割合で「非常に興味がある」が25%，「興味がある」が59%，「あまり興味がない」が15%，「全然興味がない」が1%であり，84%の学生が自分の習得している外国語に興味を持っていることがはっきりになった。

「会話力はどうであるか」について，「上手」を選択したのは僅か5%，「普通」は57%，「あまりよくない」は32%，「下手」は6%という割合である。学生たちの62%が自分の会話力を肯定している。その反面，自己否定しているのも38%も占めているから，三分の一以上の学生が自分の会話力に自信を持っていないのも事実である。それに，「今の自分の言語力に満足しているか」についても同じ，68%が肯定的な回答であったが，やはり三分の一ぐらいの学生が否定的な回答をした。

学習目的についても調査された結果，「将来のため」と答えた人の割合が最も高く80%であり，「外国に行くため」が13%，「両親のため」が2%，「目的がない」が6%占められている。目的がはっきりしていそうに見えるが，実は「将来のため」というのが漠然な回答であり，中に具体的な目的も含まれているはずであるといえなくもないが，目的は抽象的で，具体化されていないのも目立つ。

2) 講義中の媒介語について

「中国語で受講することを認められるか」について，どのように考えているか聞いたところ，「認められる」

とする人の割合が94%となっている。ほとんどの学生が中国語で授業を受けることに抵抗していないようである。そして、「モンゴル語で受講するのを望んでいるか」と聞いたところ、40%の人が「はい」と答え、60%の人が「いいえ」と答えた。半分以上の学生が中国語で受講することを十分だと考えていることが分かり、一方、三分の一ぐらいは母語で受講できるのを期待しているのも明らかになった。

さらに、学生の中国語のレベルが受講言語選択志向に影響があるだろうと仮定し、「中国語で自由に会話できるか」と聞いたところ、「できる」と答えた人の割合は68%であり、「できない」と答えた人は32%占めている。それで、仮定された内容が確立できると言えるわけである。だが、数値が8%ずれているのも問題になると思う。つまり、言語上の支障がなくても母語で受講したいという人もいるということになる。

3) 講義担当教師について

教師が学生にとって主導的な存在だから、学生に対する影響は言うまでもない。だから、講義担当教師に対するイメージ、教師の授業法なども調査した。その中、「モンゴル族と漢民族の先生の中でどちらが好きか」と聞いたところ、「漢民族の先生」を選んだ割合が29%、「モンゴル族の先生」のほうは71%と上回っている。同じ民族の人に親切感や共通感を持っていることが窺える。

それから、「先生は授業中中国語と目標言語の異同について解釈するか」という質問に「はい」と答えたのは83%と最も高く、「先生はモンゴル語と目標言語の異同について解釈するか」となると、「いいえ」と答えた人が55%占め、「はい」と答えた人が44%となる。その結果から教師が中国語と目標言語間の相違を中心に解釈していることも分かるであろう。

最後に、「先生が英語（日本語）の学習方法を教えるか」と聞いたところ、「はい」と答えた人の割合は68%であり、また、「先生の教えた学習方法はあなたに役に立つか」という質問に、「はい」と答えた人は73%占めている。教師から学習ストラテジーについての紹介はまだ不十分なところがあるのではないかとと思われる。

4) 母語及び中国語の影響に対する評価

母語及び受講中の言語である中国語の影響を判明するための調査結果は以下のとおりである。「母語であるモンゴル語に関する知識が英語（日本語）の勉強に役に立つか」と聞いたところ、78%の回答は「はい」であり、「中国語に関する知識が英語（日本語）の勉強

に役に立つか」について、「はい」を選んだ人が79%占められている。この結果から、第一言語の「正の転移」についての評価が最も多く、「負の転移」についての認識はまだ不足していると思われる。

5) 教材使用状況

今使っている教材の現状についても調査を行った。その結果、今使用中の教材の97%が中国語で作成されたものと分かった。そして、教材に対する評価について、65%の学生が「今の教材が好き」と答え、その反面、今使用している教材が気に入っていない人も35%占められているようである。さらに、今後の教材作りについて、「モンゴル語の教材を作る必要があるか」と聞いたところ、「必要がある」と回答された割合は43%であり、「必要はない」と回答された割合は56%とやや高い。この問題について意見が大きく分かれていた。

6) 学習ストラテジーの有無

学習ストラテジーとは学習者が習得の過程において使用する方法のことである。オックスフォードによって「記憶ストラテジー」、「認知ストラテジー」、「補償ストラテジー」、「メタストラテジー」、「情意ストラテジー」、「社会的ストラテジー」と分類された。今度の調査では、これら学習ストラテジーがモンゴル語ネイティブの学生にどのくらい生かされているかに視線を置いた。結果はTable2で示されている。

Table2 学習ストラテジーの状況調査

質問	回答 はい (割合)	いいえ (割合)
受講中、先生の講義に積極的に反応しているか。	48%	52%
学習中、問題解決に集中できるか。	82%	18%
予習しているか。	85%	15%
記憶効果をアップさせる方法があるか。	76%	24%
授業後復習と学習内容のまとめをするか。	60%	40%
明確な学習計画を立てるか。	41%	59%
よく他人と学習の体験について交流するか。	41%	59%
自分の英語（日本語）についての興味を養おうとしているか。	63%	37%
学習のことについてよく他人を励むか。	33%	67%
自分の情緒を意識的に調整して学習するか。	70%	30%

英語（日本語）を使って外国人と交流するか.	43%	57%
学習ストラテジーを紹介した本を読んだことがあるか.	32%	68%

その結果から見たところ、学習過程中の予復習活動は自律的にしていることが分かった。ただ、半分くらいの学生が授業中積極的に受講していないのも判明した。そればかりでなく、学習経験をお互いに交流せず、外国人と積極的な交流も少なく、学習計画を立てる習慣がないのも大きな問題であろう。それから、学習ストラテジーについての科学的な認識の欠如も目立つと思われる。

7) 教授法

さて、実際の教室の中の教授法はどうなっているだろうか。それについて次のTable3の結果となっている。

Table3 項目別教授方法

教授項目	方 法
語彙	①朗読練習 ②語彙の構造分析 ③聞き取り練習 ④翻訳 ⑤類義語と反対語を紹介する。
文法	①接続、意味と使い方について解釈する。それから、例文を挙げる、最後に文を作らせる。 ②意味同じの文型を比較して説明する。 ③例文を中国語に訳させる。
文章	①語彙、文法を中心に内容を解釈する。 ②朗読練習をさせる。 ③文章を訳させる。 ④文章構造分析をする。
発音	①テープなど使用して、学生に模倣させる。 ②発音する時の舌の位置を紹介する。 ③繰り返して発音させる。

IV. 問題点と課題：

内蒙古地域内のモンゴル語ネイティブの外国語を専攻している学生は中国語ネイティブの学生に比べてみれば、落ちこぼれの人数が多いこと、学力上から言えば一定の格差があることは本研究によって否定されなかった。一方、本研究は内蒙古地域におけるモンゴル語ネイティブの学生が言語習得中の不利な要因の究明を目指したものであり、それに関して調査結果から見ると次の要因が挙げられると思う。

1. モンゴルネイティブ学生に対する外国語教育の発足遅れが要因になる。

長い間、各類の学校における外国語の授業を担当する教師は漢民族の者が絶対多数であった。それが1997年になってモンゴル語ネイティブの外国語専門

教師が登場されるようになり、その後各大学がモンゴルネイティブの学生を外国語専門の入試対象とされた。モンゴル語ネイティブ学生に対する外国語習得教育が発足されたのが遅かったため、いまのところ、教育現場では中国語ネイティブの学生とほぼ同様な指導法が行われている。モンゴルネイティブの学生の特徴に応じた教授法に関する研究と実践はまだ発足していないようである。そのため、それを今後の大きな課題とされなければならないと思う。

2. 授業内容に対する把握が学生の中国語レベルによって制限される。

今研究によって学生の中国語のレベルが教授内容への理解につながっていることが明らかになった。学生の中約32%の人が中国語でまだ自由に会話できないものの、中国語で受講せざるを得ないのが現実である。だから、インプットされた知識に関する正しい理解が始めから獲得できないのも当然に考えられる。それを解決するには、授業方法及び媒介言語の使用について再検討する必要があると思われる。特に、調査結果から初級段階で中国語を媒介言語として大量に使われているという事実が分かり、そこで初級段階における教授法や媒介言語の使用形式を中心にアプローチすべきであろう。言語だけでなく、図形、絵、写真、実物、音声など媒介によって授業を実施したほうが学生にとってもっと分かりやすい手段になるかもしれない。そして、学生の中で中国語の文法解説に関する専門用語が分かりにくい言葉になりうる傾向がある。そこで、文法解説に関する専門用語だけはそれに対応できるモンゴル語の語彙を調べておく事前作業をしたほうがきっと効果的であろう。さらに、今後の課題として、第二言語習得理論の媒介言語の転移理論に基づく中国語媒介言語としての是非を考察すべきだと思う。

3. 学生の学習ストラテジーの不足も大きな要因になる。

学習ストラテジーの面における問題点として主に学習計画を立てる習慣の欠乏、授業中教師の質問に答えようとする意欲の低下、学習ストラテジーについての知識の欠如、習得された外国語で積極的に応用しようとする意志の希薄などが挙げられる。だから、学生に正確な学習ストラテジーについての情報供与など学習ストラテジーに対する促進作業をしなければならないと思う。学習ストラテジーに関する研究は数多くあるが、その中からモンゴル語ネイティブの学生に適応す

る効果的な学習ストラテジーとは何であろう。そしてそれによつての学習習慣を如何に養成させるかも今後の課題の一つとして重要視しなければならないと思う。

4. 長い間の心理暗示の影響も要因の一つである。

長い間、続けられてきたモンゴルネイティブの外国語レベルの低下状況によつて、モンゴルネイティブの外国語学力が劣るのは当然視され、一つの心理的サジェストとなっている。自分の言語能力に自己否定する傾向が生じているようである。この現象を解決するには、学生の民族プライドを喚起し、努力さえすれば外国語が誰でも習得できるものであるという自信を育む教育が大切であると思われる。

おわりに

内蒙古のモンゴル語ネイティブを対象とする大学専門外国語教育はグローバル化が進んだ21世紀の需要に応じてスタートされ、モンゴル族の国際的人材育成に大きな役割を立った。しかし、中国語ネイティブの学生に比べて、まだ格差があることも事実である。本研究ではモンゴル語ネイティブの学生の学習実態を調査し、格差が出た原因を考察した。したがって、教育経験の不足、媒介言語の干渉、教授法の柔軟性の欠如、学生の学習ストラテジーの不足、自己否定傾向など要因が判明された。本研究では、事実のみ確認できて、解決法に関してはさらに研究する必要がある、これからの研究課題としたいと考えている。

参考・引用文献

- 1) シム・カミンズ, マルセル・ダネシ (中島和子・高垣俊之訳) (2005)『カナダの継承語教育 多文化・多言語主義を目指して』明石書店
- 2) コリン・ペーカー (岡秀夫訳・編) (1993)『バイリンガル教育と第二言語習得』大修館書店
- 3) 中島和子 (1998)『バイリンガル教育の方法』アルク
- 4) 矢野葉子 (2001)「多言語使用社会シンガポールにおける日本語教育についての一考察」『昭和女子大学大学院日本語教育研究紀要』1, 57-64.
- 5) ゴイハン (2008)「内モンゴル自治区の民族教育をめぐる諸問題」『内蒙古社会科学』2, 112-118.